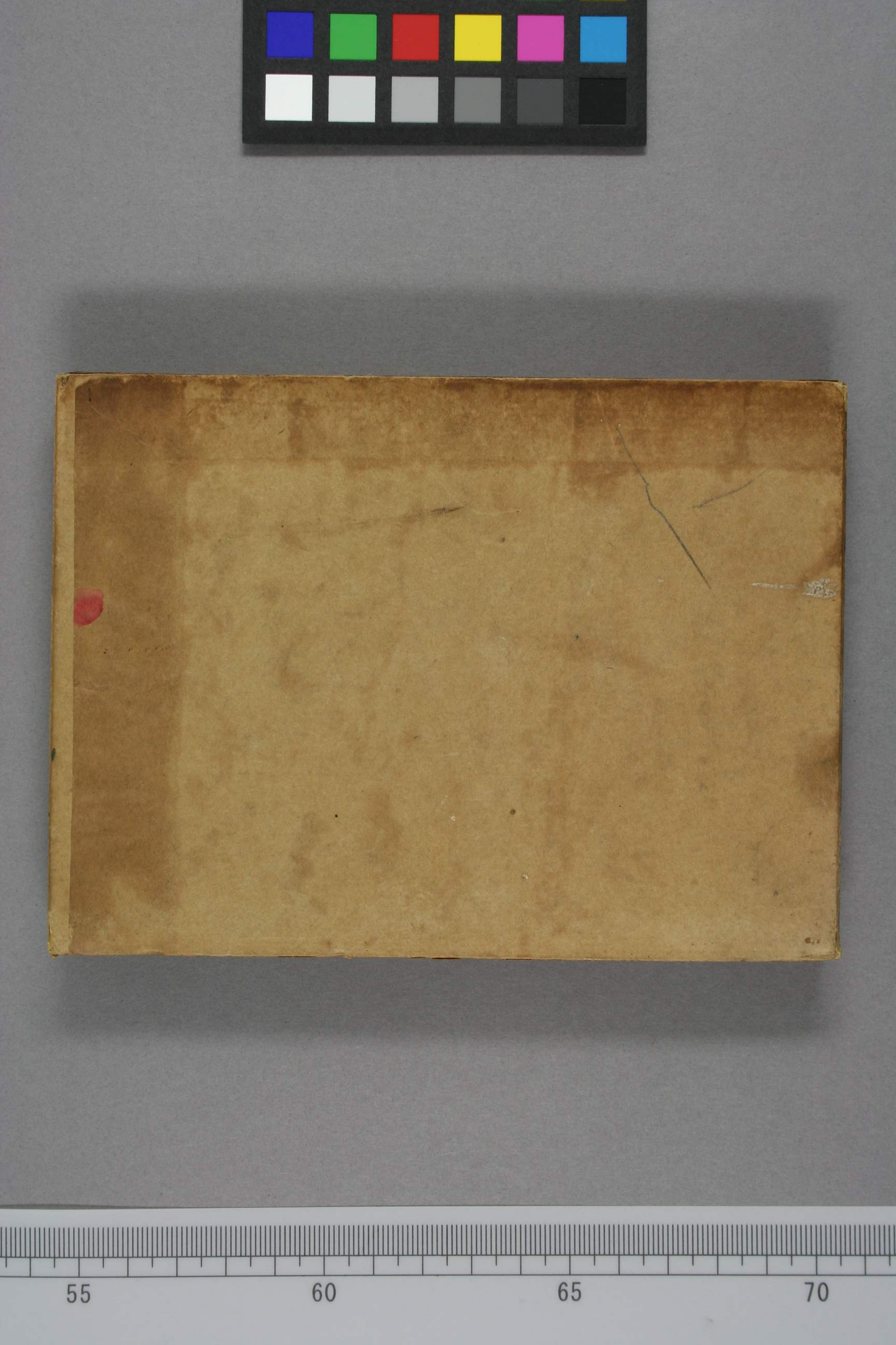
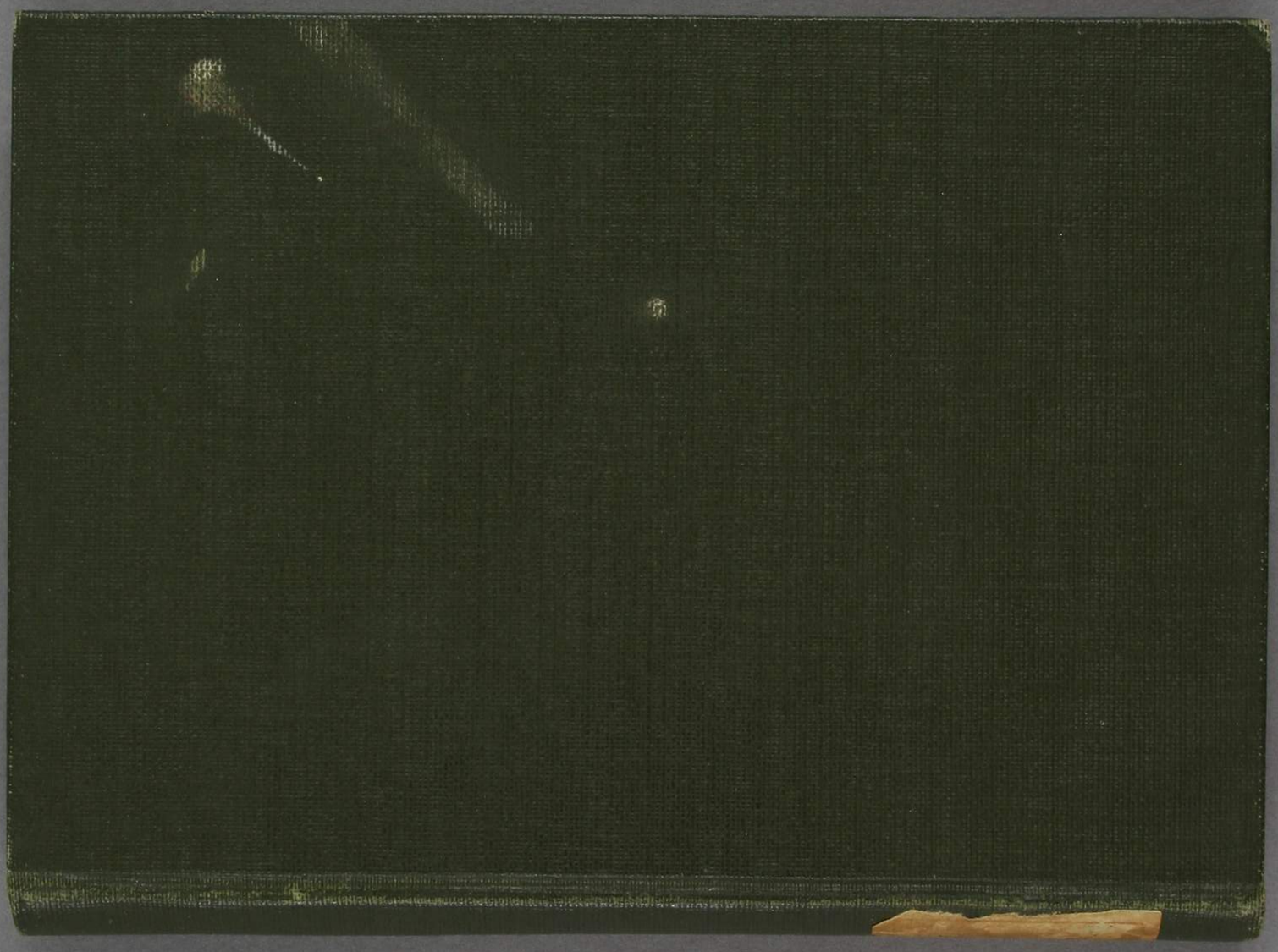


みなかみ

短歌集

若山牧水著



水

上

みなかみ

若山牧水著

本書を亡き父に捧ぐ

本書の初めに

本書には大正元年九月ころから詠み始めて、翌二年三月に及ぶ約半年間の作歌五百餘首が輯められてある。卽ちわが前歌集「死か藝術か」に續くものである。その半ヶ年を中心に前後約一年間、私は鄕里日向國尾鈴山の北麓に歸つてゐた。父の病氣、父の死亡、及び久しくうち捨てておいた家事の整理などに烈しく心を痛めながら作つてゐた歌である。

分たれた五章は歌の出來た時の順序を示したものである。なかで、初めの一章などは從來の我が詠みぶりと大差がないが、次ぎの「黑薔薇」以後に及ぶと、よほど其處に變化が起つて來て

ぬる。

この變化に就いて自ら多少の說明を加へたい心地もするが、今はまだその時でないと思ふ。そして此等の作の價値はとにかく、斯くの如き傾向の生じたことは、私の歌の歷史にとり强ち無意味のことで無いと私は自ら信じてゐる。尙ほこの事に關しては廣く一般の批評意見を聽きたいものと望んでゐる。私の心中に斯ういふ變化の起りかけてゐたのは決して昨今のことではなかつた。然し、昨年偶然父の病氣のために鄕里に歸つて、苦痛ではあつたが極めて淸純な孤獨の境地に身を置くことを得たために、かねてから芽を出しかけてゐた希望が殆ど何の顧慮障礙なくして自由に外に表れて來たといふかたちであつた。單に

歌に對するのみでなく　自他の生活に對する考へなども餘程よく變つて來たと認めらるることを、本書の出版に際して私はわが鄕里の山河に感謝したい。尙ほ暫く其處に留るつもりでゐたのであつたが、いろいろの事情から今年の五月また惶しく上京して來てしまつた。折角、彼の深山蒼海の間に養はれた尊い心持をむざむざ亡ぼして了ひはせぬかと心痛して居る。

思ひ出のために、本書に緣ある寫眞三葉を挿入しておいた。父の寫眞は死ぬる前々年あたりのものである。平常極めて健康な人であつたが、昨年の夏七月急に病くなつて床についた。初め半身不髓のやうな容子で、積年の酒毒であらうと皆云つてゐ

たが、私が歸つて暫くすると、殆ど全快した。十一月十四日の朝、いつも私は獨りだけ二階の部屋に寢てゐたので、その日も何心なく二階から降りてゆくと、勝手の臺所に丹前を着て父が寢てゐる。朝早くから斯んなところにどうしたのだと訊くと、側にゐた母が、なアに昨夜の飲みすぎだらうと笑ひながらいふので私も何心なく戯談など云ひかけて、やがて毎朝やるやうに裏の山に散歩に出かけた。二十分間も歩いたかと思はるるころ姪が泣き聲を張り上げて呼びに來た。驚いて馳け歸つてみると父は既に人事不省であつた。しがみついて呼びたてても聞えるる風はなく、一言をも發せず、惶しく口うつしに吹き込む水をも嚥み下さず、醫者が來て二三度試みた注射も效無く、終に不歸

の人となつてしまつた。病名は腦溢血、年は六十八歳であつた。祖父若山健海の長男で、立藏と呼んだ。祖父の代から醫者で、酒を過すのと我がままなのとで評判はさまざまであつたが、近郷ひとしく彼の技倆をば重んじてゐた。私と違つて彼は甚だ寡言で、飽くまで善良な性質を持つてゐた。そのくせ、幼い山氣を胸に斷たなかつた人で、山林や鑛山などに幾度も手を出して祖父の殘していつた財産をば忽ちにして空費してしまひ、後には家宅庭園の修繕をなす餘裕すら持たなかつた。それで、また平氣なものであつた。私とは親子といふより寧ろ親しい友達といつた樣な關係を保つてゐた。永い間の私の不孝に對しても露ばかり怒るでもなく恨むでなく、終始他に對して私を辯護愛撫

することにのみ力めてゐた。一度、病氣も快くなつてゐたので、今年の春には兩人相携へて上京する約束が出來てゐたのである。いろいろな大きな病院を參觀し、いろ〳〵な好い酒と料理とをあさることを子供のやうな彼がどんなに樂しんでゐたであらう。考へだせば、いつもの微笑を失はずに冷く眠り去つた彼の顏が眼に浮び、いつでも涙が流れてくる。相見、相笑ふことの出來なくなつた今日彼に對する尊敬と愛慕とは荒れすさんだ私の胸の中に日ましに深く浸んで行きつつある。「今日の佛ほど、さまざまな人に泣かれた佛は御座りませぬ」といつて泣いてゐた葬式の日の人々のことすら、なつかしく思ひ浮ばれて來る。

第二の寫眞にあるのが卽ち父の死んだ家、三十年前に私の生

れた家である、石垣も塀も門も庭も何年か前に頽れたままに任せてあつて、頽蘺そのものの姿のやうだ。第三は南面の家の庭先からやや東に向つて見た峯と溪とである。溪も私などの生ひ育つたころよりずつと水も少くなり、一切苔の深い岩石のみであつた河床が、山林濫伐から來るといふ毎年の洪水で悉くけばけばしい礫原と變じて、いやな溪になつてしまつた。前面の山は尾鈴山の連山の一つで七曲峠といふ嶮しい山なのだが寫眞の具合でたいへん低くやさしく見える。この溪の下流の海に入るところが私の大好きな美々津といふ古い港で、「海及び船室」などに收められた海の歌は大方其處で出來たものである。

まことに郷里坪谷村の一年間は、私にとつて今までにない内省的な、割合に豊かな生活を送げさせてくれたと思つてゐる。その生活の滴りがこの短いかたちの詩のなかに幾分でも落ちてゐてくれれば幸ひであると思ふ。

今日は八月二十一日、あと三日すれば私の第二十八回目の誕生日に當る。私の上京後、彼の山の家にうつらうつら病んでゐるといふ老母の上にも、四六時中おちつきのない時間にのみ追はれてゐる私自身の上にも、静かな祝福のあれかしと祈られてならない。

大正二年八月二十一日

若山牧水

故郷……一
黒薔薇……七一
父の死後……一二三
海及び船室……一五七
醉樵歌……二二五

故

郷

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り

朝づく日うすき紅葉の山に照りつちもぬく
みて鵯鳥の啼く

獨りなれば秋の小山の日だまりの朝の日か
げを酒と酌まうよ

ほと照れりわが吸ふほどの風もなき山の窪
地の秋の朝の日

蠟燭のともるにも似む朝づく日かなしき山
をわが歩み居り

眼や病める涙ながれてはてもなし秋の朝日

の裏山行けば

秋のおち葉栴檀の木にかけあがり來よと兒

猫がわれにいどめる

爪延びぬ爪を剪らむと思ひ立ち幾日すぎけ

む、日々窓晴るる

まだら黄に枯れゆく秋の草のかげ啼くこほ

ろぎの眸の黒さかな

草山に膝をいだきつまんまるに眞赤き秋の
夕日をぞ見る

草山にねてあるほどにあかあかと去にがて
にすと夕日さすなり

樹のかげぞながうなりゆく山の端の秋の夕
日に染みつつ居れば

阿蘇荒れの日にかもあらめうすうすとかす
みのごとく秋の山曇る

ながめゐてなつかしがりしこの山にいまこそ登れなみだのごとく

血咳るとだにの兒はだに這ふにや似む夕日の山をわが攀ぢのぼる

浮みいで松のみ青くひかり居りけはしき山の秋の夕日に

秋の夕日にうかみ煙れる山山の峰かぞへむとしてこころさびしき

心より落ち散れる葉にものいはむさびしき
われとなる日ありや、森

秋の山柴にひそめるだにの兒もいまは夕日
のいろに染みゆく

母が飼ふ秋蠶の匂ひたちまよふ家の片すみ
に置きぬ机を

ふた親もわが身もあはれあかあかと秋の夕
日のかげに立つごとし

いづくにか父の聲きこゆこの古き大きなる
家の秋のゆふべに

まんまるに袖ひきあはせ足ちぢめ日向にね
むる、父よ風邪ひかめ

父よなど坐るとすればうとうとと薄きねむ
りに耽りたまふぞ

とりわけて夕日よくさす古家の西の窓邊は
父のよく居るところ

ほたほたとよろこぶ父のあから顔この世な
らぬ尊さに涙おちぬれ

父よいざ出でたまへたすけまゐらせむこの
低き岡越ゆることなにぞ

わがそばにこころぬけたるすがたしてとす
れば父の來て居ること多し

さきのこと思ふときならめ善き父の眉ぞく
もれる眉ぞ曇れる

親と兒のなかのかなしき約束の解かれぬま
まにいま朽ちむとす

秋の日あし追ひつつうつる群をおひ父ひも
すがら蠅うちくらす

二階の時計したの時計がたがへゆく針の歩
みを合はせむと父

父がのを聞くがつらさにわれもせし咳くせ
となりあらためがたし

老いふけし父の友どちうちつどひ酒酌む冬の窓の夕陽

どの爺のかほもいづれもみななつかしみな善き父に似たる爺たち

かくばかり踏まれてもなほうすうすと青き芽をのみふくとすや生命

蜜蜂も赤く染まりて夕日さすかなしき軒をめぐるなりけり

痛き玉掌にもてるごとしふるさとの秋の夕

日の山をあふげば

あかあかと秋の入日にそめられて落穂ひろ

へる、姪かあらじか

夕日の家かずをたがへて時をうつ古き時計

も生きたるごとし

なにをかもよろこびとせむふるさとに埋る

る身は梨腐るごとし

眠いつぱいに悲しき顔の見えてきぬわれの
疲労のなかより來にけむ

壺のなかにねむれるごとしこのふるさとか
なしみに壺の透きとほれかし

つるむ小鳥うれたる蜜柑おち葉の栴檀家を
めぐりて夕陽してあり

栴檀の葉に秋のきたるは質わろき玉のひそ
ひそ光れるごとし

太陽にむかひしがめつくせるわがつらの皮
膚のこはばりも朝はうれしき

園には鷄蜜柑朝の日枇杷のはな父がたちい
で摘める柚子の實

しんしんと頭痛めり、悲しき幻影、輝ける市街
の停車場の見ゆ

しんしんと頭痛めり、悲しき幻影、下の關の海
峽に高き窓つくる

憎まれ者のわれに媚びむとするこころにや
わが部屋に鏡臺を置くといふ姪

鰯のみ食ひつつ幾日すぎにけむ栴檀の葉の
日日散る家に

煙草の灰がぽつたりと膝におちしときなつ
かしき瀬の音聞えくるかな

おお、夜の瀬の鳴ることよおもひでのはたと
とだえてさびしき耳に

一ところ山に夕日のさせるごとく東京の市
街をおもひてぞ居る

寸ばかりちひさき繪にも似て見ゆれおもひ
つめたる秋の東京

數寄屋橋より有樂座見るものごしにこころ
をなしておもふ秋の市街

相摸の港津の國のみなといづくもみな秋と
なるらむ旅をしぞおもふ

一りんの冬の薔薇のうすくれなゐなつかし
きものに手にもとるかな

冬の薔薇われを憎める姉の娘が折りてあた
へしくれなる薔薇

わが園の山梔子の實の日ごと黄くなりまさ
りゆき雪も降らず居り

くちなしのちひさく黄なる實をふたつにさ
けば悲しき匂ひ冬の陽に出づ

わが生は浪、海のなかなるひとつの浪まつさを
の浪ゆたゆたの浪

久しくひかりを見ざる眼のごとくそこひ痛
みて友のこひしき

爲すことみな悔とならざるなき我が日今朝
も新しく輝きてあり

薔薇の花びらのごとく鮮かに起きてあり薔
薇の花びらのごとく冷き朝に

愛すべきは朝の光線なりまことに光線にむ
かへる我が疲れし瞳なり

さるにても不思議なるはわが健康かな鐵の
碎片のいよいよ黑く輝けるごとし

くだもののごとき港よ横濱の思ひ出は酸く
腐り居にけり

とある旅館の窓の硝子にうつりゐし秋の港
の朱の帆黄なる帆

黒き帽子黒き背廣着て街路ゆくとありめづ
らかに來し友のたよりに

さなりげに都は冬のつめたくて汝が戀人も
輝きてあらむ

健康の完かりせばこのさびしさ消えむかと
おもふ、朝、冷えし鏡

あはれ悲し玉にくもりのなきごとく健かな
らむ健かならむ

われを恨み罵りしはてに噤みたる母のくち
もとにひとつの歯もなき

斯る氣質におはする母にねがはくは長き病
の來ることなかれ

母が愛は刀のごときものなりきさなりいま
だにそのごとくあらむ

そそくさと夕陽にうかみ小止みなく働く庭
の母を見じとす

夕されば爐邊に家族つどひあふそのときを
われはもとも恐れき

母にも姉にも對座をいとふ臆病のわれのこ
ころの澄みたるかなや

飲むなと叱り叱りながらに母がつぐうす暗
き部屋の夜の酒のいろ

わづかの酒に醉ひては母のつねに似ずくち
かろく、夜のかなしかりけり

猫が踊るに大ぐちあけてみな笑ふ父も母も、
われも泣き笑ひする

あはれ今夜のごとく家族のこころみな一い
ろにあれ一いろにあれ

姉はみな母に似たりきわれひとり父に似た
るもなにかいたまし

くちぎたなく父を罵る今夜の姉もわれゆゑ
にかとこころ怯ゆる

あはれみのこころし湧けるときならむしみ
じみものいふ母の悲しも

母をおもへばわが家は玉のごとく冷たし父
をおもへば山のごとく温かし

くづ折れてすがらむとすれど母のこころ悲
哀に澄みて寄るべくもなし

こころより母を讃ふるときのありそのとき
のわれのいかにかなしき

うちつけにものいふことをも恐れ居るその
兒をなほし憎みたまふや

なま傷にさはらぬやうに朝夕の世間話にも
氣をおく納戸

ひとを憚りてわれを叱れる父の聲きかむと
して先づ涙おちぬれ

父と母くちをつぐみてむかひあへる姿は石
のごとくさびしき

家に出づる羽蟻の話も案のごとくこの不孝者のうへに落ち終りけり

母、姉、われ、涙ぐみたる話のたえま魚屋入り來ぬ、魚の匂へる

なぜに斯く蜂多きならむわが家の軒のめぐりは蜂ばかりなり

斯くおほく蜂に見馴れてはいつしかに友だちのごともおもはるる、冬

醉ひざめの水の飲みすぎしくしくと腹に痛み

て冬の朝來ぬ

ときどきに部屋より出でて身に浴ぶる冬の

日光のうす樺いろよ

帽子なしに歩くくせつきしふるさとの冬の

日光のわびしいかなや

母の聲姪の泣くこゑとりどりの肉聲さびし

わが家の冬

西の窓の障子の紙が血のごとく夕陽にぞ染
む父の背後に

鶏ぬすむ猫殺さむと深夜の家に父と母とが
盛れる毒薬

泥棒猫をころして埋むる山際の金柑の根の
つちの荒さよ

死んだ猫をさげし指さきに金柑をつみてく
らへどきたなしとせず

ほとほと不要となりし父のテーブルを借り
きて二階の窓邊にぞ据ゆ

前の山より反射する冬の日光のしづけき明
るみ包めり書齋を

その障子もこの窓もみなしめきりて冬の夕
陽に親しみて居り

椅子ながら山山の間の落日を見居れば、二階、
父の入り來ぬ

葉よりさらにみどりに透けるちさき蟲薔薇
の葉に居りき、夕陽に透ける薔薇に

花いちりん葉が三四枚まがりくねれる九寸
ほどの薔薇よ、この冬の薔薇よ

薔薇の葉を喰ふ蟲を見出しこの部屋のなに
やら明るくなりし思ひす

夕陽のかげちひさき黒き蟲のふん机に散り
てあり、薔薇に蟲居り

鹿の角を十四五本もなげ入れし古びし箱を
見いでけり、朝

父が獵りしものなりと云ふ鹿の角眞黑くす
すけ寶石に似る

低聲に卑俗なる唄うたひつつ夕陽の椅子を
離るるはよき

褪せてちればつぎなる小枝さして置く薔薇
とわれとの冬の幾日

斯くあきらかに秋の日光がわが肌にさせる
は痛き冷笑に似たり

わが肌に觸るるもの眼にうつるものいづれ
か痛き冷笑にあらざる

信ぜむとねがひ信じたりとおもひ思へども
こころの何處にか細き風吹く

わが朝夕の生活をうすき板のごとく思ひて
裏より覗かむとする

はたと踏みつけむわが生の地にも斯のごと
き冬の夕陽が散りてあるべしと思ふ

わが窓に黑き幕來て垂れてあり汝が生を靜
にはぐくめよとて

梟のごとくわれを見守るもあり、杜鵑の如く
かすめ行くもあり、悔ぞ群れたる

起き出でて戸を繰れば瀨はひかり居り冬の
朝日のけぶれる峽に

今朝もよく晴れたり、今し朝食後の散歩に越

ゆるちひさき冬の山

五日がほど讀書に過ぎぬ、つかれたる暗き頭

に親しきこの冬

静かなれ冬の日、わきてけふ一日、朝よりここ

ろ死せるがごときに

机のうへの二りんの薔薇にも愛憎の湧く日

なり、眼昏し

青杉の大枝をさせば北窓の机小暗しわれの

讀書に

山河みな古き陶器のごとくなるこのふるさ

との冬を愛せむ

十一月三日、今年はすでに天長節の日にあらず、悲しみて

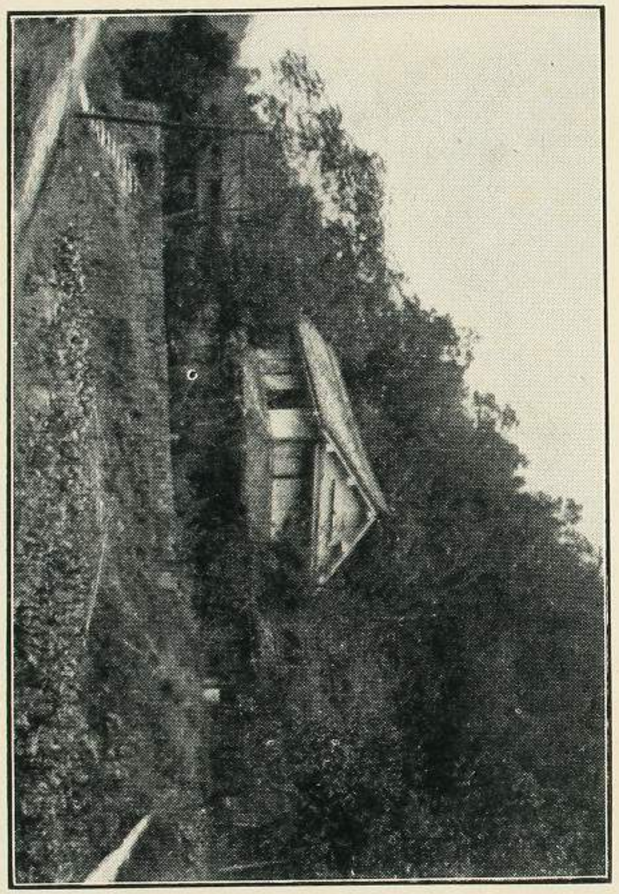
うたへる歌三首

曇りなき十一月三日の空の日のかなしいか

なや靜かに照れる

かしこしやこの一もとの菊にさへ大御心の
のこれるごとき

野に生ふる草山にそびゆる樹のごときこの
こころもて悲しみまつる



かしこしやこの もとの菊にさへ大御心の
のこれるごとき

野に生ふる草山にそびゆる樹のごときこの
こころもて悲しみまつる

黑薔薇

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志
をまぐるなといふが如くに

飽くなき自己虐待者に續ぎ來たる、朝、朝のい
かに悲しき

新たにまた生るべし、われとわが身に斯く云
ふとき、涙ながれき

靜かにいま薔薇の花びらに來て息へるうす
きいのちに夜の光れり

こころづけば鏡に薔薇がうつりてあり繪具
のごとくわが顏の動けるそばに

ふと觸るればしとどに搖れて陰影をつくる
くれなゐの薔薇よ冬の夜の薔薇よ

ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の
夜の枝のなやましさよ

はち切るごとき精力を身に持ちたしと呼吸
をぞとむる、薔薇のくれなゐ

わが生存力はいまだ火を知らざる如し、油に
黑く濡れて輝けど

傲慢なる河瀬の音よ、呼吸はげしき灯のまへ
のわれよ、血のごとき薔薇よ

悲しみとともに歩めかし薔薇、悲しみの靴の
音をみだすなかれ薔薇

吸ふ呼吸の吐く呼吸のわれの静けさに薔薇
のくれなゐも病めるが如し

わがかなしさは海にしあればこのごとき河
瀬の音は身に染まず、痛し

やうやくに馬の跫音のきこえきぬ悲しき夜
も明けむとすらし

日に蒼みゆく神經質になりゐしにふと心づ
きぬ、とある冬の朝

饑ゑたる蟲幹にひそめる樹のごとくわが家
の何處にか冷たさのあり

愛すべきただ一りんの薔薇あり、この日のわ
れの靜かなるかな

斯る孤獨に我が居るときに見出でたる一り
んの薔薇を愛でも惱める
薔薇を愛するはげに孤獨を愛するなりきわ
が悲しみを愛するなりき

虛しき命に映りつつ眞黑き玉のごとく冬薔
薇の花の輝きてあり

われ素足に靑き枝葉の薔薇を踏まむ、かなし
きものを滅ぼさむため

薔薇に見入るひとみ、いのちの痛きに觸るる
ひとみ、冬日の午後の鬱憂

悲しみの影も滅びつ、見入りたる一りんの薔
薇の黒くしぞ見ゆ

古びし心臓を棄つるがごとくひややかに冬
薔薇のくれなゐにひとみ對へり

聞き馴れては蟲もどこやら鑛物の音するご
とし、もはや冬なり

愛する薔薇を蝕ばむ蟲を眺めてあり貧しき
わが感情を刺さるるごとくに

机の前の夜の山よりまひて來し濃みどりの
蛾のとびてやすまず

日光が行燈のごとく灯のかげがわが心の光
明の世界に似たり

灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬ、
かなしき寢醒の漸く眠りを思ふときに

わが悲しみは青かりき、水のごとかりき、火と
なるべきかはた石となるべきか

わが煙草の煙のゆくとき、夕陽の部屋薔薇は
かなしき鬱憂となる

しづかなる休息、冷やかなる休息、この木漏日
のごとき休息

この冬の夜に愛すべきもの、薔薇あり、つめた
き紅の郵便切手あり

ひいやりと腰のあたりがなにものにか觸れ
しがごとくくづるる冥想
疲れしにや、いないまやうやく痛める眼にか
なしき朝を見むとするなり

わが孤獨に根を置きぬればこの薔薇の褪す
る日永久にあらじとぞ思ふ
思ひつめてはみな石のごとく默み、黑き石の
ごとく並ぶ、家族の爭論

ゆふぐれのわが家の厨の喧燥は古沼のごと
し、西に高き窓

家のいづくにか時計ありて痛き時を打つ、陰
影より出でよ、出でよとて打つ

窓よ暗かれ、わが悲しき孤獨の日に、机のばら
のさむきくれなゐ

ついと眼をそらして、つとめの如く薔薇を見
る、愛する讀書にも尙ほ耽り得ずや

黒鐵のごとき机に身を凭せて薔薇にひやや
かに眺め入りたる

わが孤獨の悲哀にひそかに觸るるごとく、冬
の夜の薔薇にうちむかひ居り

懷疑は曇れる日の海のごとし、痛きにほひに
いのちもまた曇るなれ

昨夜のわれとこよひの我と肉體のほかいづ
くに係りありて生けるにや

あるがままを考へなほしてみむとするこ
ろと絶對に新らしくせむとする心と

ひとの眼の哀樂はただよく描かれし布の上
のつめたき繪なり

ともし斯くもするはみな同じ、やめよ、さらば
われの斯くして在るは

いづれ同じことなり太陽の光線がさつさと
わが眼孔を拔け通れかし

感覺も思索もいちど斷れてはまたつなぐべ
からずつなぐべくもあらず

窓に倚れば悲哀は朝のごとく明るく、鳥に似
てわが命の影もさすなり

窓際は悲しめる女の皮膚のごとし、いないな
その如くわれもまた悲し

わが瞳は涙に濡れてかがやき日に照らされ
し萬象はみな死にて冷し

陽を浴びつつ夜を思ふはこころ痛し、新しき
不可思議に觸るるごとくに

脂肪にや額の皮膚のこはばれる或る冬の日
の午後、多き蜂

青やかに光れる鎌ひとつ地の上に在り、足跡
はあれど人は見えず、眞晝

髪延びし後頭部にも居るごとし、一疋の蜂、赤
いろの蜂

斯くばかり明るき光りさす窓になにとて悔
をのみ思ふらむ

この山梔子の實に似ても靜かなれかし、何故
にわれの斯くあはただしきや

やや深きためいきをつけば、机のうへ、眞青の
薔薇の葉が動く、冬の夜

高き窓より一すぢの薄明り、さすげなれども
冷しわが眼

窓は傷のごとし、いためるいのちの上に光り
射すことを恐るればなり

窓に向ふとき、わが眼古びし蠟のごとくこは
ばることあり、瞑ぢて居るべし

窓より光線を見るも厭はし、わが眼松の皮と
なるに似たれば

運命とは云はじ、在るがままのこの一りんの
薔薇のごとく悲しきもの

薔薇は薔薇の悲しみのために花となり青き
枝葉のかげに傲れる

なめらかにしてあぶらのごとき夜、窓を包め
り、窓邊には薔薇とわれ

ラムプを手に狹き入口を開けば先づ薔薇の
見えぬ、深き闇の部屋に

あまりに身近に薔薇のあるに驚きぬ、机にし
がみつきて讀書してゐしが

冬をしかと捉へてわが皮膚の血を注さむと
するがごとき寂しさ

言葉に信實あれ、わがいのちの沈默より滴り
落つる短きことばに

忘れものばかりしてゐるやうな、おちつきの
ない男の机の鮮紅薔薇

そうだ、あんまり自分のことばかり考へてゐ
た、四邊は洞のやうに暗い

自分のこころを、ほんとうに自分のものにす
るために、たびたび來て机に坐るけれど
全く自由な絶對境がないものなら、斯うして
眺むる薔薇はうつくしい

晝は晝で、夜は一層薔薇が冷いやうだ、何しろ
おちつかぬ自分の心
と思ふまに薔薇がはらはらと散つた、朝、久し
ぶりに來た暗い机に

じいつと薔薇に見入るこころ、じいつと自分
に親しまうとする心、

薔薇を貰ひに隣家へ姪をやつた、人知れぬ涙
ぐましい心地で

北向きの暗い机にたびたび來ては坐るがす
ぐ讀書にも疲れる

斯うしてじいつと夜のばらを見てゐるとき
も心は薔薇のやうに靜かでない

薔薇が水を吸ひやめたやうだ、玻璃のちひさな瓶の冬のばらが

しかたなさにばらを見てゐるのかも知れぬ
あかい薔薇、つめたい薔薇

考へだせばみなからつぼのやうに思へてくる、机のうへの冬薔薇の美しいこと

散つてみれば案外な花瓣の大きさ、薄さ、紅さ、
冬の夜の机の薔薇

無論そうして働いてうまい物を食ふのもい
い、そうしてゐ給へ、君はほんとに健康さうだ

きういふこともあらう、さうであらう、何しろ
自分は自分で忙しい

太陽の光線は地球の表皮だけに功能がある
のだらうかなどとも考へる

自分をたづぬるために孔を掘り、孔ばかりが
若し殘つたら

朝など、何だか自分が薄い皮ででもあるやう
に思はるるときがある

焚火、焚火、焚火に限るやうになつた、このごろ
の自分に最もふさはしい焚火

叔父さん、今朝氷がはつたと姪が呼ぶ、そうか
眼が痛いほどいい氣持だ、寢床
冷い、冷いと心からふるへて爐のそばに寄つ
てゆく、朝のわが身をいとしいと思ふ

木の切端を投げだしたやうにめいめいの朝
の膳が並んだ、爐には焚火

ランプの灯は石油のやうな憂鬱で、窓の夜と
私とにそそぐ

そうさ、鼠のやうに飲んでやる、この冬の夜
の苦い酒

眞黒な布で部屋を張りつめ、椅子も机も、服も
でも黒くしたい

父の死後

あなかしこし靜けき御魂に觸るるごとく父よ御墓にけふも詣で來ぬ

御墓にまほでては水さし花をきす、甲斐なき
わざをわがなせるかな

この墓場のつめたきもなにかなつかしく榕
の木かげを去にがてにする

冷たき、見知らぬ境に入るごとくけふもひそ
かに墓場にぞ來ぬ

榕のみ茂れる墓場、くらき墓場、此處にしもつ
ひにねむりたまふか

御墓ちかづく、墓場の暗き傾斜よりこころは
黒き玉とかがやき

あはただしく薔薇を摘みきて挿しぬ、父逝き
てのちのわれのいとしさに

父の死後、いまだ十日を出でず、わがこころ川
原の砂の白くすさみたり

喪の家の爐邊、榾火のかげに赤き母が指姉が
ゆび我が指のさびしさよ

わが厨の狹き深き入口に夕陽さし淵のごと
し禁みて母の働ける
ものいはぬわれを見守る老母の顏、ゆふぐれ
の爐邊のうす暗さよ

いろいろに考ふれど心に染むことなし、來む
明日さへ、おもへば恐し
わが幸福の裏には常にわれを見守る冷笑あ
り、薄き朝のひかりのごとく

空にひくき冬の朝の太陽、底無しのさびしき
夜より出でて來しわれ

起きいづれば太陽はとく峰にあり、氷れる溪
にのぞみたる家

嘔を見て笑はずにゐられぬほどに浮きたち
し心は今朝の空よりも碧し

思ひだしたやうに水仙が匂ふ、水仙が匂ふ、朝
の讀書の机に

朱欒の實、もろ手にあまる朱欒の實、いだきて
ぞ入る暗き書齋に

明るき山かな、朝の日のさせり、病める鳥かも、
木の根にぞ啼く

薔薇を手近に寄せぬ、闇夜の雷鳴に氷のごと
くふるへ居るこの机よ

雨のなかの冬の樫の樹、灯の窓より樫にむか
へる薔薇のくれなゐ

紺いろの小鳥をたなごころにそつと握り放

たじとする、死んだこころ

なんとやら頭ばかりが重たうて歩きにくか

りぐつと踏みしめむ

飴のやうに粘土のやうに、このこころ成れ、い

ろいろに細工してみむ

やす鏡、てらてら鏡、青い鏡に伸びたり縮んだ

り、我がこころ

この繪のやうにまつ白な熊の兒となり、藍い
ろの海、死ぬるまで泳がばや

きゆうとつまめばぴいとなくひな人形、きゆ
うとつまみてぴいとなかする

要するにうその話、うたはうたへどわがここ
ろ身にやどらず

啼け、啼け、まだ啼かぬか、むねのうちの藍いろ
の、盲目のこの鳥

安心できるやうな大きな溜息を吐かうとて

背延びしたれば、頭痛めり

冷ゆればすぐに風邪をひく、あはれにもたし

かなるわが皮膚かな

饑て一片の麵麭をぬすまむとするごとくわ

が命の眼ひらけり

何處より來れるや我がいのちを信ぜむとつ

とむる心、その心さへとらへがたし

眼をひらかむとして、またおもふ、わが生の日
光のさびしさよ

闇か、われか、眼ざめたる夜半の寢床をめぐれ
るもの、すべて空し

何にもあれ貪ることに倦みて來ぬ、わびしや
友情にも

地の皮膚にさせる日光と、陰翳と、わがいのち
の繪具と、正午の新鮮

死人の指の動くごとく、わが貧しきいのちを
追求せむとする心よ

載るかぎり机に林檎をのせ朱欒を載せ、その
匂ひのなかに靜まりて居る

机のうへ林檎とざぼんとのなかに小さき鏡
を置き、讀書の疲れを慰めむとす

三つ四つころがれる朱欒の匂ひに書齋は鬱
鬱として病めり、わが讀書

酒の後、指にあぶらの出でてきぬ、こよひひと
しほ匂へ朱欒よ

今朝わが頭は水晶のごとくに澄めり、林檎よ
匂へ、朱欒よ匂へ、二月この朝

ざぼんの實の黄にして大なる、りんごの實の
そのそばにして悲しみて匂へる

みちのくの津輕の林檎、この林檎、手にとりて
おもふみちのくの津輕

醉うて居れ、醉うて居れ、ほんとうに醉うて居れ、外目をしながら心が斯う呟く

靜座に耐へられなくなれば、ついと立つ、立つて歩く、貧しい心そのもののやうに

人がみなものをいふうとましさよ、わがくちびるのみにくさよ

盡くるなき怠屈のうちにあれかしと思ふ、死人のゆびの動く勿れかしと思ふ

わがたい・くつの夜に墓の啼くが聞ゆ、雨もま
ばらにわが心にふりそそぐ

疲れたるか頭よ、かすかに耳鳴りのする、耳鳴
りのする、いで床へいそがむ

空洞なるわがからだにも睡眠をおもふ時の
來ぬ、したしき夜よ

何にもあれ、はや塗らむとぞおもふ、甕を溢る
るつめたき繪具、悲しき心

氣に入つた甕でもあらば、甕のかたちに、はや
なりなまし、わがこころ

身ぶるひをする藍いろの小鳥、そのやうにわ
れの心も、いざ、身ぶるひをせむ

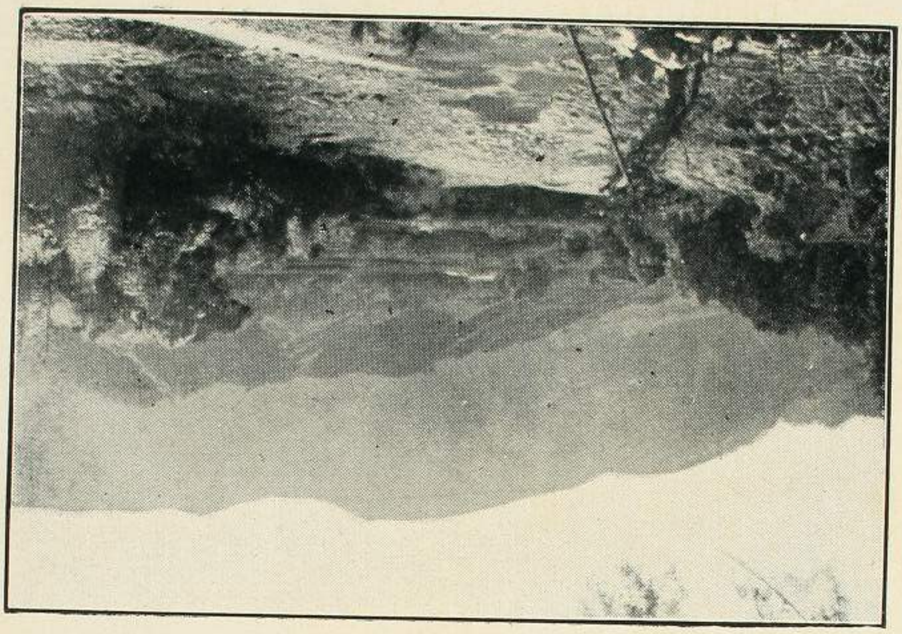
こころの闇に浸みる瀬の音、心のうつろに響
く瀬の音、瀬の音、瀬の音

渓の瀬のおとはいよいよ澄みゆき夜もふか
めどいづくぞやわがこころは

もとめて得ざるものなしといへる人あり、すべて空しといふ人あり、群れるかな

死を感ぜよ、まことにひとり生けるごとき命を感ぜよ、まことに感ぜよ

裂けばとてこの古甕になにものの入りてあるべき入りてあるべき



海及び船室

一月初旬より二月初旬にかけ、九州の沿岸を一周せり、

歌四十四首。

闇のうちにあまた帆ぞ鳴る、帆ぞ動く、わが汽船の漸く動き出でむとする港に

船室の窓よりやはらかき朝日きたる、いでわ
がいとしき麥酒を呼ばむかな

濤よりの反射か、船室の朝日の搖るることよ、
やはらかきことよ

身體は皮膚のみのごとくつかれたり、船室の
窓よりかなしき朝日きたる

酒後の身を朝日が染め、船が搖る、甲板あゆめ
ば飛魚がとぶ

飛ぶ、飛ぶ、とび魚がとぶ、朝日のなかをあはれ
かなしきこころとなり

太陽のこなたに帆が見ゆる、かげりて黑く死
せるごとき帆

すれすれに絶壁の岬を過ぐ、わが船室の時計
のおと

風出でて浪ぞ立つ、朝日いまだ低くして陰翳
のみ多き海に

わが顔にまともにさせる濃き朝日、船は搖れ
に搖れ、濃き朝日

親船をはなるる艀、ゆらゆらと晝のみなとに
浮びいでたれ

船のかがみにうつる額の蒼さよな、旅なるわ
れの眼の痛さよな

朝の甲板にざあざあとして水そそぐ、濃き陽
のなかの四五の萌黄服

防波堤に群れゐて市街のひとあそぶ、晝のみ
なとにうかべるわが汽船
艀なるわれ等見つめてかき噤み眞晝の波止
場ひと群れて居り

汽船おりてしき石踏めばしんしんと腦にぞ
ひびく、晝のみなと市街
乘換驛、待ちゐし汽車に乘りうつる、窓にま白
き冬の海かな

大海の荒れの岸邊の浪のかげに人群るる見

ゆわが冬の汽車

汽車の窓べに蜜柑の皮をむきつつも身をか

きほそめ昨夜のこと悔ゆ

松の青さよ、とある悔をばおもひいで眼の痛

きとき、わが汽車の窓に

風たてば有明の海は大いなる白き瀬となる

わが小蒸汽船よ

有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は
島原へ入る

冬雲のかげりに暗き島、岬、憂き島原へわが船
は入る

船に乗り海を渡る、なんのたのしみぞ、船に乗
り縁もなき海を渡る

眼に膜の張りたらむごとき心地して島原へ
行く船にわが在り

何のために此處には來にけむ、何處に居るも
心になんの變りあるべき

島原は海にうかべるかなしみか、宿屋のてす
り、倚ればつめたき

島原の宿屋にこもり晝も出でず、ひとりしわ
れをはかなみて居り

あはれ此處にもはかなき記憶を刻まむとし
はかなき行ひをわがするなりき

風も凪ぎゆふべとなれば有明の海はあぶら
の如し、憂鬱

うるはしく笑ふものかな、笑ふなかれ、わがさ
びしさに相觸るるなかれ

箱崎の濱のしら砂ふみさくみ海のなかみち
見ればかなしも　（海の中道は岬の名なり）

博多なる冬の黒さよ、わが瞳、水の暗さよ、灯の
つめたさよ

冬山の國ざかひなるいただきを搖れまがり
つつ行けるわが汽車

櫻島はけむりを吐かぬ島なりき、あはれ死に
たる火の山にありき

梅寒き宿屋の二階、すみの部屋、夕日の薩摩明
らけく見ゆ

醉ひざめのこころの水のごとかるに痛しや
夕日あかあかと浸む

海の黒さよ、ほそぼそとしてうかびたる佐多
の岬の夕日の濃さよ

浪高み船のあゆみの遅さよな、みさきの端の
白き燈臺

入りゆけば港はおもきらくじつに鷗のむれ
も灰色に見ゆ

やよ窓に灯をともすなかれ、海はいま薔薇い
ろに暮る、やよわが黒船

やよ老人、いま船室には君とわれのみ我がさ
かづきをねがはくは受けよ

船は搖るれども歩むともなし、窓に黑く月夜
の陸が見ゆれども動かず

あはれ悲し、いで衣服をぬがばやと思ふ、海は
青き魚のごとくうねり光れり

あまり赤く、あまりあまきこの密柑かな、海は
をんなに似て青く動く日

心のみいらだちて身はガラスの玉のごとし
海は動く、蒼くななめに動く

身ぞ染まる、青き笑、人魚の笑、海死にてわが眼
石のごとく盲ひたるに

絶壁を這ひあがる、黒き猫とや見えむ、いまか
なしき絶壁を這ひ上る

とかくして登りつきたる山のごとき巨岩の
うへのわれに海青し

岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟
人ちさき帆を上ぐ

孤獨よ、黑鐵のごときこの岩の上にあざやか
に我が陰翳を刻め

さかしくも孤獨のひとみの輝くことよ、黑鐵
なせる岩の間に

かなしくも海に濡れたるわがいのち、わが孤
獨、あはれ太陽よりかくれまほしき

悲しみに身もいらち、黒く巨いなる岩のかげ
に尿をぞする、海青く動く

うれし、うれし、海が曇る、これから漸く私のか
らだにもあぶらが出る

蜘蛛が海よりも大きく見ゆ、眼のまへに松よ
りさがりし蜘蛛

岬なる鬱憂の森、海は病み、ただ一羽かなしき
鳥まへり

身體は一枚の眼となりぬ、青くかがやける海、
ひらたき太陽

岩のあひだを這ひて歩く、はだしで、笑ひて、海
とわれと

鵜が一羽不意にとびたちぬ、岩かげの藍いろ
の浪のふくらみより

下駄をぬいでおいたところへ來た、これから
また市街へ歸るのだ

岬の森よりしぶしぶ歸らむとすれば、港の市
街にかなしき汽笛鳴る

この帆にも日光の明暗あり、かなしや、あをき
海のうへに

水平線が鋸の刃のごとく見ゆ、太陽のかげ
なる浪のいたましさよ

太陽の具合で海がわが額の皺のやうに襞を
つくる、呼吸の苦しいこの窓

わが窓の冷たさよ、海はけふ實にいく度びか
色彩を變へけむ

少女よ、その蜜柑を摘むことなかれ、かなしき
葉のかげの

ひややかに海のごとく廣き帆の來りぬ、港の
旅館の窓のまへに

微雨のなかに鳥まへり、海の蒼さ、冷たさ、やう
やく夜とならむとするこの窓

光無き海、濃き藍色にたたえたり、雨晴れむと
して一羽のしろき鳥

闇夜の波は戀するをんなの指のごとし、小ラ
ムプとわれとの窓のしたに

窓から下を見おろす、つめたい夜がうなじに
も背にも

わがこころよ、今し鵜のごとくかへり來よ、夜
の窓、濤のひびきのみ滿てるに
精力を浪費するなかれ、はぐくめよと涙して
おもふ、夜の濤に濡れし窓邊に

闇に眼の馴れぬあひだの港の市街、戸出づれ
ば濤の四方にくだくる
かなしき月出づるなりけり、限りなく闇なれ
とねがふ海のうへの夜に

とある雲のかたちに夏をおもひいでぬ、三月

の海のさびしき紫紺

春の日の眞黑き岩にあふむけにまろがりて

居れば睡眠さしきたる

太陽にあたためられしこの黑きおほいなる

岩にいざやねむらむ

白き猫そらになくがにあをうみの春日のかげに啼き居る鷗

われ知らずうたひいだせるわが聲のさびしさよ、春日紫紺いろの海

淫慾は冷たかりけり、濃くうすくわが身のうへに照りかげりする

這ひあがり岩のかどより海を見る、さびしき紫紺、さびしき浪のむれ

をちこちに岩のとがれる、陰翳おほき午後四
時の紺の海となりにけり

岩かどに着物かきさき爪をやぶりきりぎし
を攀づ、椿折るとて

潮引きてつかれはてたる岩かどにせまき海
見え浪のうごける

油なし浪ぞねばれる、曇り日の海に群れたる
海女のをとめ等

高まりたかまりつひに碎けずにきえゆきし
曇り日の沖の浪のかがげかな

わが頰のかすかの熱や、小窓より海見てあれ
ば蝙蝠のとぶ

なみ高し、雨後の春日をはらみたる綿雲のか
げにみさご啼くなり

石のごと首つきいだし二階なる窓に海見つ
つ疲れはてにけり

げにながく見ずありけりと海を見にうちい
でてきぬこころを運び

夜の海あぶらのごとく油繪のごとく孤獨を
かなしさしむる

春のうみ魚のごとくに舟をやるうらわかき
舟子は唄もうたはず

海を見てあり、海に染められわがこころしば
しいろづく、海を見てあり

太陽を拜まむ、海もそらもひとつ色なり、いま
太陽ををろがまむ

太陽をたのしめとふと心に云ひておどろき
て涙ながれぬ

椿の花、椿のはな、わがこころも一枚の繪のご
とくなれ一面となれ

紺いろの干潮の海はわがこころの淺きにも
似てもの憂かりけり

わびしき濱かな、貝からのくず砂のくずいさ
やひろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひ
かりかすかに光る

よるの雨そこともわかぬ海岸にほのじろき
泡のつづくなりけり

わがたましひのはしに悲しく染まり居る海
の蒼みよ、夜となりにけり

潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼け
ば下りくるがあり

おのづから盲目のごとく岩を踏む、海見れば
湧くおもひさびしも

夕陽に透き浪のそこひに魚の見ゆ、あるまじ
きこと思ふべからず

默然と岩を見つめておもふこと、ひとに告ぐ
べききはならなくに

手に觸るるわびしき記憶あざやけき悔岩を
めぐりて浪ぞむらがる

古き繪の布のやぶれにのこりたるわびしき
藍の海となりにけり

日本語のまづしさか、わがこころの貧しさか
海は痩せて青くひかれり

太陽かがやき引しほの海は羽あをき一羽の
蝶となりてうごかず

をんなの匂ひなりけり、ふと雲がわたれば海
のあをくかげれる

たらたらと砂ぞくづるるわが踏めば砂ぞく
づるる、あゐ色のうみの低さよ

一灣の海の蒼みの深みゆきわが顔に來て苦
痛とぞなる

海もまた倦むらし、わが靈魂は曇らむとす、い
づくに動き行かむとするや小蟹よ

木の葉にも盛れるがごとく海は小さし、わが
命燃え燃えて、一すぢの青き煙たつ

椿の木、椿の木、わが憂愁にきらきらとひらた
き海のうつりかがやく

天地創造の日の悲哀と苦痛とけふわが胸に
新たなり、海にうかべる鳥だにもなし

陰翳を知らざるかの太陽のほとりよりうま
れて雲のおりてくるなり

けぶりなし搖れゆる海の反映、陽は黄ばみ
わが顔の海の反映

ふと浪にむかひてうすく笑ひけり、あやふき
岩を降りはてしとき

浪のかげより顔をいだせる海女のあり、眼も
あをあをと口笛を吹く

あら砂のすさめるこころ蒼白み海にむかひ
てうちうめくかな

海よかげれ水平線の黝みより雲よ出で來て
海わたれかし

岩かげの浪のひとつのふくらみに彼女のか
ほをえがき淋しむ

わが顏の海の反映、一羽のかもめしらじらと
してよひいでにけり

日光のかげのごとくにちちちらと海鳥あま
たむれとべるかな

鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あ

さあさどかげりきたりぬ

栖めるかぎりのやどかりをみな殺しつくし

静けき岩になすよしもがな

醉　樵　歌

われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日

つめたや、われも木を伐る

春の木立に小斧振ることのかなしさよ、前後
不覺に伐りくづしけり

さくさくと伐りてありしが、待てしばし、しば
しはものをおもはざりける

栂の木のしげれるかげに小半どきあまり小
斧ふり伐りたふしける

春の木は水氣ゆたかに鉈切れのよしといふ
なり春の木を伐る

山柴の樫の冬青木のいろいろあるなかに椿
まじれるかなしかりけり

椿の木は葉のしげければぽつたりとつめた
き音してつちにたふるる

わが伐りし木木のみだれてたふれたる青き
すがたを見てあるしばし

ややありて指にはまめのできてきぬもはや
やめむと木かげに坐る

青木伐り、つかれて村のむすめたち夜床のく
しきはなしをぞする

きびしさにむすめの群に入りゆけばひとり
のむすめわれにいふことに

峰高み海見をすれば春がすみをどめるをち
に青く見ゆかに

ながめ居ればかすみのをちに見えきたる海
あり海のなかに島あり

あの山この山粘土細工のごとくにも見えき

たるなり淋しみて居ればる

人聲ぞとおもへば烏にありにけり春日けぶ

れるみねの松山

見おろせばふもとに山の幾うねりうねれる

にみな松の生ひたる

をのへなる松の山こそ明るけれそのまつ山

に入りゆく樵夫

そこかしこ山に老木の松をもとめ大まさか
りをふるふ男よ

そのそばに子どもと犬とがついて居り大ま
さかりを振るきこりのそばに

つぎつぎに伐り倒さるる松の木をながめて
居れば春日さびしも

どよめかしまつたく松のたふれ終りぬ大ま
さかりの汗ばめるかな

わな見にとまだきに行けばおほいなる兎か
かり居りわれを見て啼く

わな張りしは椿のかげにありにけりうさぎ
かかりて椿散り居り

霞に濡れて黒くつめたく山がせまる、窪地の
しげみに雉子待つわれに

かすんだ山にをりをり風が來る、樹が鳴る、わ
が手の銃のつめたさよ

つつの音がわれとわがこころに響く、深夜の
酒のごとくひびく

我がかなしみに火をつけるやうに、地團太踏
みて鳥を逐ふなり

見知らぬ窪地の灌木原におりて來た、見廻せ
ば、見まはせば春の鳥啼く

傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ぢむとて走
せ寄れば、青き樅の樹

テーブルの上いつぱいに枝はひろがり咲き
群がる躑躅、夜の青い瓶
ペンさきに滲み出るインキ、ふと顔をあぐれ
ば顔をつつめるつつじ

赤いつつじの咲きみだれた夜のテーブルに
洋燈をつけて、すぐ消した
夜になれば健康の恢復して來るごときわが
身體、ラムプのかげの躑躅

黄色なつつじもあると思ふ、この血のごとき
つつじのほかに、夜のテーブル
不眠症ととざさぬ窓と戸外の闇と、ときどき
机に落つる赤い躑躅

わけとてはなくぢだんだを踏んでよろこん
でみた、喜んだとてなににならうぞ
居るところを失くしたこころがうつとりと
かなしい日光を見つめて居る

遠い麓に杉の木がまばらに立つて居る、人の
生にある悲哀のやうに

燒酎に蜂蜜を混ずればうまい酒となる、酒と
なる、春の外光

わがこころは極りなし、底もなし、ふたもなし、
その心先づありやなしや

萬葉集、いにしへびとのかなしみに身も染ま
りつつ讀む萬葉集

人麿の歌をしみじみ讀めるとき汗となり春
の日は背をながるる

からくりめけるわれのこころのはたらきの
はたと止まれり、雲雀うららうらら

この國に雪も降らねばわがこころ乾きにか
わき春に入るなり

穴だらけのわが心のその穴にこの穴に小鳥
が眼を出しぴいとなき、ぴいと啼く

藍甕に顔をひたしてしたしたにしたたる藍

を見ばやとぞ思ふ

鶺鴒が雲雀の聲によく似るとこころに云ひ

てあふぐ春の日

氣がつけばこの春はいまだ椿を見ず、くれな

ゐの花をさびしくおもへり

曇日のかすみのなかに烏啼き鶺鴒啼き溪に

のぞみてこの窓の高さよな

じつと忍んで見て居れば、墓が啼く、大きな咽の
喉をあけて春の日に啼く

オヤ、そこにも啼く、なかに椎の樹二三本、けら
らけらと墓啼きかはす

墓の眼のかなしさよ、つまが戀しとひたなき
に啼くその墓の眼

踏めばくづるる山の赤つち、乾いた土、どこに
しのんで墓の啼くぞえ

ほろほろとつちのくづれて墓の啼く、きりぎ
しの春のつちのわれめに

水甕に烙きつけられしつめたい青い裸體畫
のやうなわがこころ

觸れなばただちにものをばわれのいろに染
めむ火のごとき心燃えたたず居り

なやましき匂ひなりけり、わがさびしさの深
きかげより鰭ふりて來る

をんなが濡れた繪具のごとくそばを通る、つ
めたいさびしい春の一日

我がうてるうさぎ雉子の肉つねに厨の釘に
絶えざり、春暮れかかる

夜ふけの厨にうさぎの股をさきとりて火に
あぶるとき、きたれる孤獨

なにはあれ第一の峰にのぼらむとかすめる
山の脊を歩み居り

深山わけ入り朽木の松のふしを掘るその松
の節たいまつとなる

けむりありて山に野火燃ゆ、くもり日のひか
れるそらを啼きゆく烏

太陽のかげりてゆけば悲しみつ雲いでて照
ればよろこびぬ峰のとがりに

朝の園爐裡猫もとりわけあまゆるをあやし
てあれば啼けるうぐひす

けふも雨ふる、蛙よろこびしよぼしよぼに濡
れて櫻も咲きいでにけり

ねられぬままに起きて机の椅子に凭る、家を
つつめる夜の雨かな

春雨にみかさまさりて谷ぞこを石のながる
るねざめてぞ聞く

春の日のぬくみかなしも、ひたすらに淺瀨に
たちて鮎つり居れば

瀬の鮎子わが痩脛もきよらかに寒みいたみて春はゆくなり

鳥うちのかへさは夜となりにけり山ざくらさへうちかざしたる

すずしげに顔の感覚はたらけり、のちのつかれをおもはずもがな

不眠症のラムプのかげのわが夜明、瓦たたきて雨ふりしきる

夜の蝶のこの濃ねずみのなつかしや、このいろなせる帽子かぶらむ

いだ釣ると春の川瀬につどひたるふるさとびとら黒き衣着る

わが好きはこの灌木の原なれや、高くそびえてかげる樹もなし

くだらぬものおもひをばやめにせむ、なにか匂ふは屁臭蔓か

海いろにうちかげり居りかづら取るとてわ
がひとり入る尾鈴の山は

樅に這ふ青きかづらよそのかづら取らむと
樅をのぞみつつ行く

いとながきかづらにありけり青きかづら引
けども引けども盡きむともせず

春の日や老いしかづらのあをあをと葉をつ
けて居り青かづら引く

いとながく青きかづらをわれの引く身うち
のちからこめてわが引く
ぬすみする人のごとくにひそひそと深山に
ひとりかづら引くなり

わが身十あまりあはせてなほ足らぬふとき
縱なりよきかづら生ふる

かづら生ふるは山の北かげ春の日のにほひ
もさむき山の北かげ

青かづら籠にみちみちぬいまはとてかへら
むとすれば山も暮れにき

みなかみ

大正二年九月五日印刷
大正二年九月十日發行
定價 金七拾錢

著作者 若山繁 東京市京橋區銀座三丁目八番地
發行者 初山仁三郎 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者 小松周助 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所 東洋印刷株式會社 東京・京都・大阪

發行所 初山書店 東京市京橋區銀座三丁目
振替貯金 東京二四一七番
大阪市南久太郎町三丁目
振替貯金大阪一三六八六番
京都市祇園町南側萬壽小路
振替貯金大阪二〇八九二番

歌集

昨日まで

吉井勇著

昨日まで・秋と冬・郊外
夏・紅燈・
谷に來て・二藝人・逃亡